

米欧亜回覧

第50号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集 総務部会

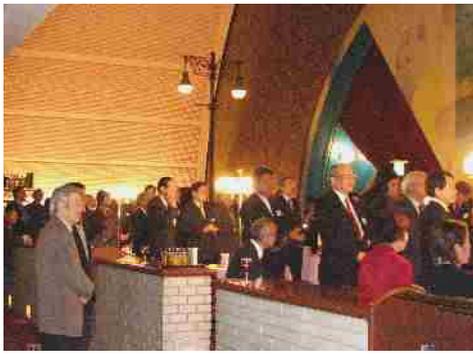
NHK・BS特集「世界から見たニッポン」を見る

四月の全体例会は二十日(日)総会も兼ねて

四月の全体例会は四月二十日(日)の十三時〜十七時、国際文化会館の講堂で行う。

一部(十三時〜十四時)は「総会」、二部(十四時〜十七時)は、左記のような企画になる。

NHKのBS特集「世界から見たニッポン」(明治編)を見て、NHKの制作担当者から制作にまつわる裏話を聞く。当日は制作責任者の辻泰明氏が来会・解説下さることになった。



新年懇親例会 (1月25日)

詳細はあらためて案内するが、乞うご期待。

新年懇親例会は

ロシア・テーマで盛況!

新年懇親例会は一月二十五日(金)十八時三十分〜二十時三十分、日本プレスセンターのレストラン・アラスカで開催され、約八十名が参加して盛会だった。

素晴らしい夜景に迎えられ、代表の泉三郎氏の挨拶、駐日ロシア大使のガルージン氏の流暢な日本語の挨拶と乾杯、そして確井俊樹氏の素敵なおピアノ演奏とソプラノ歌手ナターシャさんの歌声に酔った。まことに新年にふさわしい華やかなパーティーとなり、参会者は酒食の間に楽しく懇親の時を過ごした。(詳細は二・三頁)

立春大放談会、

会の活性化に弾み!

立春の日、一騎当千の論客? 十二名が集い、辛口・甘口含め建設的な意見が続出し、会の活

第五十号

特別記念号(増頁)

活性化に弾みがつく思いだった。

(詳細は二・三頁)

いくつかの提案については二月十九日の幹事会でも検討され、早速次の二つが具体化される。

一 ホームページ、メールの充実

これまでの中心メンバー 楠木孝雄氏、相沢真人氏、中山進氏らに、若い世代の小松優香さんが加わることになり、新展開が期待される。

二 DVD「岩倉使節団の米欧回覧」を見る、聞く、語る会」の新設

「読む会」が専門的で高度になつている現状から、新しい会員や一般及び大学院生、大学生らを対象に、泉三郎氏の解説付きで、入門と親睦を兼ねたサロン風の会を月例で行うことになった。(詳細は三頁)

「誇り高き日本人―岩倉使節団物語(仮題)」泉三郎著 PHPより出版決まる

かねてより泉三郎氏の書きためてきた千枚を超える原稿が、現代語訳「米欧回覧実記」の普及版の刊行に刺激されて、PHPから出版される運びとなった。内容はノンフィクションストーリー風で六百四十頁の分厚い本になる見込み。刊行は五月下旬の予定。

本紙「米欧亜回覧」が五十号を迎える、まことに慶賀に堪えない。これも、毎号、編集に、寄稿に、写真に、会員諸兄弟の協力があつてのこと、深く感謝の意を表したい。

顧みれば、本会の設立は平成八年の四月で、一号、二号はその半年前から出ており、当時は「TIKKI SALON」とも称していた。

歴史を学んで、日本をよくしよう!

泉三郎

「スライド上映会」が頻繁に催され、また「今、何故、米欧回覧実記なのか」、今、何故、岩倉使節団なのか」などのテーマのコラムが目立つ。それを見るにつけ「ああ、もう十年以上、多少形は違い、スライドがDVDになつても、同じようなことを言い続け、やってきたのだな」と改めて思う。

そして今春、五十号を迎えるに当り、「記念に寄稿を」と一声かけたら、たちまち多彩な原稿が集まった。当会の多士済々ぶりを証明するに充分の内容でまことに喜ばしい。前号で桑名氏が「国士無双」のタイトルで一文を寄せられたが、まさに個性豊かな人びとの集まりである事が知れる。

「TIKKI SALON」とも称していた。当会設立の契機は「岩倉使節の世界一周旅行」というスライド試写会で、平成七年九月に国際文化会館の講堂で行われた。朝十時から夕方五時までの長丁場だったが、百名にも及んだ参会者は熱心に見入ってくれた。続いて十二月には松井千恵教授の肝いりで百合女子大学で「マラソン上映会」が開かれ、百四十名余が参加して盛況だった。そこに読売新聞の記者がきていて、翌一月、全国版の夕刊一面カラーで紹介してくれた。それがきっかけで「米欧回覧の会」が生まれ、そのころの本紙をみると

千支で言えば当会も一回り、この会が素晴らしい人材の集まりであることを再認識すると共に、「初心」に戻り、会の活性化に一石を投じようと思う。過日の放談会での永富邦雄氏の言葉をいただいで、「歴史を学び、日本をよくしよう!」をキャッチフレーズに...

二〇〇八年・新年懇親例会 ロシアをテーマに盛会!

二〇〇八年の新年懇親例会は、ロシアをテーマに昨年末より企画が練られ、最初は大使公邸での開催予定であったが、急遽、大使館側の諸事情で不可能になり、日時及び場所の変更を余儀なくされた。

しかし、懇親会の中味の充実に心がけ、場所もお馴染みのレストラン・アラスカに変更して、無事開催する事が出来た。(出席者総数八十名)

懇親会はガルージン・ロシア公使による流暢な日本語での挨拶と乾杯の音頭で始まった。すでに「現代語訳・米欧回覧実記」を精読されているガルージン公使は挨拶のなかで、往時の両国の実情や、現代のロシアと日本との懸案問題にも言及されながら日口友好関係を今年さら



ガルージン・ロシア公使



サンクト・ペテルブルグ

深める年でありたいと表明された。

今年をロシア年と位置付けた我ら「米欧亜回覧の会」の趣旨にふさわしい内容となり、お忙しいなか最後までメンバーと交流された公使に紙上をかりて御礼を述べたい。

新年会に華を添えたのは素晴らしいピアノ演奏と美しい歌姫だった。ザルツブルグで世界的に著名なピアノ指導者のもとで研鑽を積み、現在国際的に活躍している三十一歳のピアノスト確井俊樹氏。その彼が、NPOとして国際的な運動を指向している我々の会の趣旨に賛同され、演奏を無料で引き受けてくれた事は本当に嬉しい事だった。

演奏曲目は、一八七二年岩倉使節団がロシアに滞在した年に生まれた、スクリャーピンの名曲とプロコイェフのソナタ第一番。続いては、ウクライナの歌姫で民族楽器バンドウーラ奏者でもあるナターシャ・グジー嬢がロシア民謡、「ともしび」とラフマニノフの「ポーカリーズ」を確井氏の伴奏で熱唱してくれた。会場は静まり返り、その



司会の山田氏(左) ナターシャ・グジーさんを紹介する藤原氏(右)

美しい哀愁をおびた透明な、水晶の様な歌声はロシアの大地の憂愁を思わせながら響き渡り、参加者の胸に熱い感動を与えた。

その後、食事と団欒になり、恒例の『実記』朗読や映像上映のプログラムもあり、好評のうちに終了した。

岩倉使節団の訪問国をテーマにした新年会は今年で十回目を迎え、残るは、スエーデンとオランダの二カ国となった。幸い当日はオランダの銀行の支店長なども参加され、



『実記』朗読は泉氏(左) DVDロシア編の上映(右)

立春放談会

当会の活性化に向けて

立春の日、国際文化会館で、呼びかけに応じた十二名が放談会を行なった。まず、泉代表から会の現状ならびに刊行予定の出版物とDVDの状況が報告された。そして、問題点の提起があり、それに応じて自由な意見が交わされた。

■ 出版の予定など

① 現代語訳『実記』普及版

慶応大学出版より出版予定の普及版について、当方の要望としては、なるべく安く、また、分冊で購入可能で、索引をつけること、装丁は目を惹くもの、携帯できるようななるべくハンディなものにするのを申し入れた。五千部以上の部数を希望している。但し、分冊にすると売れ行きにばらつきがあるため、米国編五千部、英国編四千部、その他二千部位になりそう。出版は五月の予定。

② 岩倉使節団物語(仮)

泉代表が書き溜めていた原稿が『岩倉使節団物語』(仮題)として、PHP出版から刊行されることになった。人物中心に、使節団のメンバーはもちろん、留学先や留守政府の状況まで、なるべくエピソードをまじえたノン・フィ

クションストーリー風になる。六百四十頁、二千五百円の分厚いものになる予定で、タイトルは、『誇り高き日本人―岩倉使節団物語』となる模様。

③ DVDについて

昨年つくったDVDがあまり活用されていない。慶応出版との間では、普及版の出版と一緒に販促をはかることになっているが、具体案は出ていない状況。

■ 問題点の提示と意見

① 「岩倉使節団」や「実記」を広く知ってもらう方法は?

・ 雑誌のパブリシティを広げる必要がある。
・ 日経の文化欄の影響力は非常に大きいので、そこに記事を書く方法はないか。
・ たとえば、雑誌『リベラル・タイムズ』(リベラルタイムズ社)に投稿する。月間六十万部出ている。著者が、その動機について書く欄がある。

・ 全般的に本の売れ行きが落ちている状況を鑑みると、テレビなどのメディアに訴えることが必要。
・ まず、社会科学の先生に興味を持ってもらう。公立だと教育委員会との関わりがあるため、私立のほうがアプローチしやすい。

・ 歴史関係のNPOに案内を

「来年はぜひオランダをやつて下さい。お手伝いしましょう」との嬉しいエールも戴いたよし。
 会員の皆様の多大なるご協力ご支援と当日のご参加に心より御礼を申し上げる次第である。

(文責) 藤原宣夫



乾杯の音頭をとる公使



確井俊樹氏の演奏とナターシャ・グジーさんの歌唱



(写真) 橋本吉信



DVD「岩倉使節団の米欧回覧」を見る・聞く・語る会」、四月からスタート
 幹事会でも検討され、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」を見て語りあう会を、四月から発足させることになった。

「米欧回覧実記」を読む会が、専門的で高度になつていて現状から、新しい会員や一般並びに大学院生や学生らを対象に、入門編的な部会をつくってはという意見があり、泉三郎氏が解説者になつて、「DVDの会」

を新設することになつた。四月を第一回とし月例で十回シリーズ、毎回DVDを一章ずつ上映・解説・質疑する。どこからでも参加でき、来春二月で最終回になる。原則として土曜日(または日曜日)の午後とし、場所はJICAの「地球ひろば」。会費はなるべく抑えて会員拡大につなげたい。団塊世代や大学院生などを是非勧誘してほしい。
 ・第一回、四月十二日(土)、「岩倉使節団の

出発」十三時三十分〜十六時三十分、JICA「地球ひろば」。
 ・第二回、五月十一日(日)「新しい国アメリカ、大陸横断の旅」。
 ・第三回、六月十四日(土)「ワシントン滞在と東部回覧」。
 会費、一般千円、大学院生・学生は無料。
 広報活動はメールをフルに活用する考えなので、送付先など、それに関するアイデアがあればぜひ教えてください。
 連絡申込みは、下記へ。

[連絡・申込み] 小松優香さん

080-6612-1101 yuka_komatsu1101@yahoo.co.jp

送る。コミュニティサイトにやメルマガに登録する。
 ②もつと外向けの会にできないか？
 ・新しく入ってきた人に分かり易く、その人が関わってくれるような雰囲気を作っていくことが望ましい。
 ・お硬い勉強会的イメージが強く、人をどう誘ったらいいか困る。
 ・自分と違う意見の人と話し合えることが、会の良さだと思ふ。
 ・眠っている会員が多いので、再度、会の活性化を考え直す必要がある。
 ・経済とのつながり重視した研究会にし、もつと身近な問題との接点を深める。
 ・この会に入るには、ある程度の知性、感性、経験が必要。敷居が高いという印象が強い。
 ③メンバーをもつと増やす方法はないのか？
 ・若者を引き込むことが必要、劇画化、コミック化すれば親しみ易さが出てくると思う。三十代位の若者を引き込みたい。
 ・各会員が地元の地域に働きかけることが必要。教育委員、ロータリーなどに地道に働きかける。
 ・硬い層から柔らかい層まで、何でもやる方がよいのではないかと思ふ。

④DVDの活用
 ・上映会の企画を増やすことが必要。
 ・図書館のイベントなどを活用し、上映会を地道に続けることから始める。
 ・「生涯教育」と称している時代なので、そのネットワークでDVDを上映し、会員が行って解説を行う。
 ・見ているだけで頭に入ってくる面が多いので、中・高等学校、図書館に入れる策を考えていきたい。
 ・本とDVDとを複合的に販売することが必要。
 ⑤メールやホームページをもつと活かす方法はないのか？
 ・ホームページ更新をきちんとし、広報として使えるようにする。それが若手に興味をもってもらふことに繋がる。
 ・やはりパソコンをフル活用する必要がある。
 ・国際シンポの参加者にメールで案内を送る。
 ■キャッチコピー案
 ・日本の今と明日を語り合う
 ・歴史を学んで明日を語る
 ・過去に目を閉ざす者は、未来にも盲目となる
 ・日本の基軸を見出す
 ・世界を見る、文明を観る、日本を見る
 ・学ぶ、語り合う、旅する
 ・歴史を学んで日本をよくしよう

第五十号記念特集

米欧回覧ニュース
第五十号に寄せて

前号、三名の会員に寄稿をお願いし、掲載したところ大変好評であった。そこで、今回は、多くの会員にお願い、また、公募したところ、十三名もの会員が多様な内容の原稿を寄せてくれた。その全文を、第五十号の記念特集として、四頁〜十頁下段にわたって掲載する。

「米欧回覧実記」の魅力

松井千恵

「特命全権大使米欧回覧実記」の題名は、確かにいかめしいかもしれない。しかし、「読んでごらんなさい。こんな面白い本はない」と言いたいのである。

なぜ『実記』と呼ばれるかは、久米自ら巻頭の「例言」に「東京ニ復命スルマデ、日々目撃耳聞セルヲ筆記ス、



「米欧回覧実記」
(明治11年)

是ヲ以テ回覧実記ト名ク」と書かれているからである。実物を目黒の久米美術館で見る事が出来たが、黒の革表紙、金で打ち込まれた「特命全権大使」の文字など、明治の香りを深く感じさせるものである。

まず、この『実記』を紐解いて驚くことは、その内容の豊富で、詳細を極めていることである。政治、経済、社会、軍事、教育、文化、宗教、思想などあらゆる分野にわたり、また、王宮、議会、軍事、産業施設から、牢獄、花街にいたるまで、すべてを考察の対象とし、それに久米の鋭い洞察力による分析まで加えられている。

また、記録の文章が素晴らしい。カタカナまじりの格調高い文語体で書かれているが、彼の修辭の力、比喩の巧みさ、事例やエピソードのちりばめ方は実に見事で迫力に満ち、思わず読む人を、その中にのめりこめてしまうほどの魅力がある。活字離れのした現代人には、たしかに多くの難しい漢字、漢語、外国語、専門用語がでてくる。しかし、それを調べながら読み解いて、そこに新しいものを発見することが出来るのは、実に楽しい。難しい、と、本を閉じるのではなく、どこか興味のある一つの国でもよい

から、食いついていつてほしい。「噛めば、カムほど味がでてくる」のが「米欧回覧実記」である。

次には、一国でもいい、現地に立って、読むことの魅力を味わってみると、活字だけでは得られない何かがある。私は平成五年「岩倉使節団の足跡を訪ねる旅」に参加した。もう十年以上たつのに、つい五、六年前のことのようにさえ思えるほど、印象は強く残っている。写真を見れば、さらに身近に、ひしひしと、その思いは戻ってくる。

たとえば、イギリスのリバプール、使節団の訪れた時には、世界一の大貿易港、周囲に立ち並ぶ大倉庫、眼前にあるしずかな町の姿、時の流れ、栄枯盛衰、世界情勢の変遷を深く考えさせられた。シェフィールドでは、世界にほこる大鉄工場、ヒーリー教授の説明を聞きながら、ほとんどの窓は割れたまま、これをどう解釈したらよいのか、どう表現したらいいのか分らないが、ここに立って『実記』を読むことがとても大事なことのように思われた。それと対照的なのが、ハイランド地方の昔ながらの美しい。バーナムホテルも、トロサックスホテルも、ティ湖畔のキリン村も『実記』の記事がそのまま、ありありとみえ

る。タータン姿の数人がバブパイプも聞かせてくれた。

次の国フランスでも、パリを中心にして三十四箇所を見学しているが、ここは私も旅行団と分かれて、十日間、『実記』を抱えて、ほとんど見学したので、書きたいことも沢山ある。しかし、紙面も限界なので、現場に立って「昔と今」の考察を深めることの大切さを強調して終りとする。

俄か仕込みの久米邦武ファン

鵜飼直哉

最近、米欧回覧実記にとりつかれている。

きっかけは三年ほど前に、企業OBペンクラブの例会で泉三郎氏の講演を聞いたことだった。日本史にほとんど興味を持たない私は岩倉使節団の名前だけは聞いた覚えがあったが、それ以上は何の知識も持っていなかった。せっかくの機会だから、予習のつもりで泉さんの「岩倉使節団という冒険」を買い込んだ。

パラパラと頁をめくっていたら、使節団が一八七一年十二月に横浜港をサンフランシスコに向けて船出したと書いてあることから気がついた。富士通で初の海外での開発プロジェクトの現地責任者として私がシリコンバレーに着任したのが一九七一年十二月だから、丁度百年前のことだ。そして一八七八年、久米邦武



久米邦武 (33歳)

が実記を完成してから百年たった一九七八年に私は任務を終えて帰国した。そんな他愛のない全く筋違いな発見から、この本を読み始めた。

単なる興味本位であったので、始めのうちは真面目に読んでいたわけではない。それが一転したのは次の文章(九十三頁)に接したからであった。

『西洋人の素晴らしいところは、刻苦勉励して理学、化学、重学(構造力学)の三学を開き、その原理によつて器械を工夫し利器を發明したとだ(中略)。久米流の表現でいくと、それは「力を省き、力を集め、力を分け、力を均しくする術を用い、その拙劣不敏の才知を媒助し、その利用の功を積み、今日の富強を一致せり」ということになる』

これは、全盛期のイギリスでニューカッスルの紡績工場を見たあとの、一文字下げ注記を引用されたものである(岩波版第二巻二百語十五頁)。アンダーラインの部分特に衝撃的であった。産業革命の原動力であるメカの本質を見

第1号
1995年10月26日



中集を編集する会を
試写の映像をスライド
心に、泉氏のコラムや
後記を掲載。第2号ま
「JIKKI SALON」準備室
の名称で発行されていた。

抜いた文章表現だ。三十三歳の漢学者が、一体どうして理工学分野に至るまで、このような洞察力を持ったのだらう。久米邦武とはどんな人物なのか、知りたくなった。帰宅途中、紀伊国屋書店で「米欧回覧実記」全五冊を買った。冒頭から驚いた。「西洋ノ学芸ニ」タフリック(理論)「ト」ブラチック(実験)「ヲ分ツ」(第一巻十四頁)とある。拾い読みしてみても感動の連続だ。アツトと言う間に私は「俄か仕込みの久米邦武ファン」になった。

もう一つの驚きは、訪問先での見聞録だ。ビール工場、鉄鋼所、ガラス工場などあらゆる製造現場での記録の内容と量とは驚異的だ。僅か二、三時間の間に見るべきものはきちんと見てきている。仕事で私は海外の異業種の製造現場を数多く見てきたが、どんなチームを組めばこれに匹敵する報告書を書けるだろう。最新のデジタル機器で完全装備しても、私にはどうしたらよいか見当もつかない。溢れる情報の洪水の中にある現代では、新鮮な目で観察する能力の点で維新の使命感に燃えた若者の力に遥かに及ばない。

こんな事から一人の久米邦武ファンが「実記を読む会」に仲間入りさせて頂いた。だから、私の実記に関する関心事はその歴史的背景ではなく、久米邦武の人格形成と、二千二百頁の実記を作ったプロセスの二点である。昨年末に高田誠二氏(北大名誉教授、久米美術館理事)が労作「久米邦武」をミネルヴァ書房から発行された。私には絶好のタイミングであった。さっそく入手して正月休みに夢中で読んだ。だが、幸か不幸か私の二つの問題意識には、直接の答は見当たらない。俄か仕込みであつた私

は、今や完全に虜になった。 米欧亜回覧の会とわが家族

永島脩一郎

は、今や完全に虜になった。會員の山本陽子は、私の長女である。入会は、仕事上で知己を得た浜地さんの紹介によるもので一九九七年、と聞いている。亡き妻、千代子は、陽子の奨めで入会した。一九九九年、陽子は、会社勤務を辞め、米国シカゴ近隣のノース・ウエスターン大学のMBAに学び、その卒業式に、わが家族、つまり、われら夫婦、次女の明子(めいこ)及び三女の順子の計四名全員を招待してくれた。二〇〇一年六月のことである。妻は、シカゴに向う途中、ソルトレーク大学に立寄り、『実記』の研究者に会ったようである。妻は、日本語教師で、教え子の一人が、偶々同地に住んでいたのので世話になつている。シカゴでは、使節団一行の通った道とか、宿泊したホテル等を見て歩いたが、私もこれに同行した。但し、私自身は、当時当会の活動については殆ど関心も無く、シカゴから真直ぐ帰国したが、妻、陽子及び順子は、ボストンに赴き使節団の足跡を辿ったようである。これらの事から妻の入会は多分二〇〇〇年のことかと思つている。

身は、住んでいる武蔵野市と友好関係にあるルーマニアのブラショフ市へ市から派遣された。「日本武蔵野交流センター」(当時)で約一年間勤務した。この間、ハンガリーのブダペストに行く機会があつた。これは、実は妻が計画したもので、妻自身と妻の母親が参加した当会のイギリス旅行の帰りに、当時ハンガリー在住の、日本語の教え子でハンガリー人学者に会うということが一つの目的であつた。これには、当時パリで働いていた順子も合流した。因みに、米における九・一一テロ事件の直後のことで、妻がロンドンで入手した新聞で事件直後の概要を知り得たのである。私は、二〇〇二年六月帰国、同年十月には、米国在住の、妻の高校時代の友人を夫婦で訪ねたが、この時もワシントンDC及びフィラデルフィアにおける使節団の足跡を二人で巡った。妻が二〇〇二年初版の「英訳本」全五巻を購入していたが、これを使って私が「英語で読む会」に参加したのは、二〇〇二年一月十六日に如水会館で開かれた第一回の会合であつた。中々面白く、参加者も多士済済、かなりの高出席率で参加を続けたが、告白すると、長い間、隠れ会員というか、年会費未納の潜り、であつた。この年十一月、関西歴史ツアーに夫婦で参加、この時京都国立博物館勤務の明子が、京都タワーでの懇親会に参加した。現在も、同館で研究員として働いている。妻は、当会の諸活動に積極的に参加していた。例えば当会創立五周年行事の国際会議関連の作業を嬉々としてこなしていた。また、二〇〇四年五月の北海道歴史ツアーには妻のみが参加したが、「松前の桜と北海道の旅記念文集」の作成の為、簡易印刷機を購入し、熱心にこの文集作成に取り組んでいた。

その妻が、二〇〇四年十月、北京で他界(くも膜下出血)、正に、晴天の霹靂であつた。多数の会員有志の方々が、「偲ぶ会」を八王子の「美ささ苑」で催して下さつたが、わが家族全員が招かれた。私達一同、妻が皆様に大変親しくして頂いていた事を知り、心からの感謝の気持ちで一杯である。現在、陽子と私が当会会員であるが、以上書き記した通り、明子、順子も当会と全く無縁ということではない。亡き妻は、例の「千の風」の如く、常にわが家族と共に在り、あれ程熱心に参加していた当会その後の営みを見守っているに違いないと思つている。

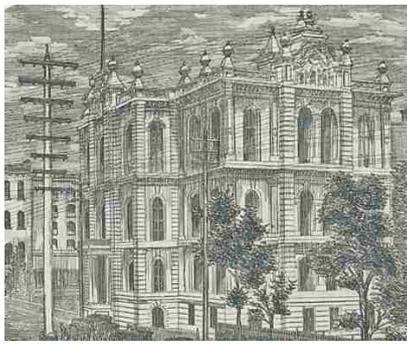
第五十号記念特集

「明治生れの親爺と日本近代史と米欧亜回覧の会」

藤田実

昭和三十五年(一九六〇)九月、明治生まれの恐い親爺の命令で羽田空港から、前日の晩、水杯を交した家族、親族や友人に見送られて、就航して間もない日本航空のジェット便でアメリカのサン・フランシスコに向った。十八歳で英語もろくに喋れなかった。

ウェーキ島やホノルルで給油しながら、サン・フランシスコに到着した。百年前に幕府の使節団がこの町にきたのかなど一瞬思った。身許保証人の人に連れられて、ミシガン州に在る大学に外国人の留学生を対象とした、英語習得の為入学して、数日後、留学生の会が催され、私も出席した。大きな大学で、学生数七



シカゴ(『実記』)

万人、留学生が常時千五百人も居た、その夜、日本人女性で、大学院生の方で、東条という方に会った。あの東条の娘さんかなと思ったが、敢えて問わなかった。もしそうであるなら、アメリカという国は懐が深いなと思った。

その後、シカゴにある大学の一年生になった。学生寮に入っていたので日本人は只一人、私だけという環境であった。少し慣れてきて、寮の娯楽室で、仲間と共にTVで深夜映画を見るようになった。どういふ訳か、戦争映画ばかりで、日本人とドイツ兵が出て来て、アメリカ兵にやられるストーリーばかりであった。

私は日本人としては、体が大きく柔道も有段者であったので、部屋に柔道着をかけてあった。アメリカ人学生は私の事を恐がっており、遠巻きにしてニヤニヤしていた。私も戦後教育の方針で、日本史といつても古代史や中世史、せいぜい江戸時代までという受験勉強の為の日本史しか習わず、近・現代史など殆ど無知であった。しかし、日本とドイツだけが悪く、英米連合国だけが善、正義の味方などと言う事は無いという思いは強く、学校の図書館で英語で書かれた太平洋戦争史を読むようになった。或る日、その文献の一節に、真珠湾攻

撃のニュースがもたらされた時、大統領のローズヴェルトと国務長官のハルがシャンペンを開けて乾杯したという一節を読んで、やはりそうだったんだとその時点で納得した。そして、歴史を学ぶ事の意義を体得し、米国滞在中はもとより帰国後も幕末から太平洋戦争に至る経緯に興味を持つようになっていった。

仕事も、日本をベースにして米欧の国々を中心に約三十年、又、この十年はアジアの国々と仕事をするようにになった関係で、それぞれの国を訪れ、現地の人々と交流するようになり、自らの行為をその交わりの中で考え、交流する事の重要性を経験している。その様な時、米欧亜回覧の会の存在を知り、時間の許す限り出席する様になった。

思えば、ほぼ四十七年前に訪れたサン・フランシスコやシカゴは岩倉使節団が訪れていた土地であり、当時の日本人が西欧に学べという事で、幕末維新直後にもかかわらず、二年近く国家の命運を賭けて学んでいったというその志こそ、大いに胸を打つものではないかと思ふのである。戦後の振れた教育の犠牲者である日本人は、その思いに深く共鳴し、正しい史実を学ぶ事こそ、この抜き差

しならぬ現代の混迷を抜け出す術はないのかという思いで日々過している。男兄弟の末っ子の私をアメリカに留学させた、あの恐い明治生まれの親爺も戦後の世相を見て、この様な事では国が危ないと考えたのではないだろうか。親爺よ、有難う。米欧を回覧した、堂々たる日本人である岩倉使節団の人々、又それを読み集まっている会のリーダー、泉さんや会員の皆様どうぞ宜しく。

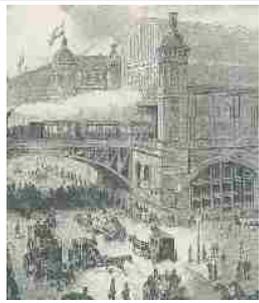
「山林保存・樹木栽培」は現代の「林政」を意味する。建議書で林政が農工商、警察、海運とならんで二番目に取り上げられていることは注目し値する。これをうけて担当部署の山林課から「山林保護の意義」、「山林局設立」、「仮山林規則」等が発議された。「山林保護の意義」はその後の林政の基本方針となり、「山林局設立」は大久保卿暗殺の翌年に実現する。「仮山林規則」は森林法の原形といふべきもので、その後幾多の曲折を経て明治三十年に「第一次森林法」として実現することになる。これらの提案は大久保内務

花の旅 大場梅子
駅の名のさてもゆかしき花の旅
あのあたり花に浮かぶや蔵王堂
うぐひすや北向く御陵しづもりて
濃き淡き桜のあはひ吉野建
さまざまなお国訛や桜狩
まだ咲かぬ奥千本の桜かな
ここよりは奥駈けの道濃山吹
谷越えて春泥を越え西行庵
馬酔木咲く西行庵に休みけり
この宿の熱き湯船や夕ざくら

岩倉使節団と明治林政 小林富士雄
明治六年五月欧米視察から帰朝した大久保は、征韓論、佐賀の乱などの難題をかたづけ、十一月には勸業・警察・地方の三行政を管轄する内務省を創設する。翌年には内務卿としての抱負を示す宿願の殖産興業政策に踏み出すべく、「大凡國の強弱ハ人民ノ貧富ニ依リ」で始まる「殖産興業建議書」でその抱負を開陳する。次いで明治八年、この抱負を具体化するためのいわゆる大久保建議書「本省事業ノ目的ヲ定ムルノ議」を提出する。

このなかで日本の商工業の遅れを克服する内務卿としての意気込みを述べ、緊急に着

手すべきは「樹芸・牧畜・農工商」、「山林保存・樹木栽培」、「地方ノ取締」、「海運」の四「條款」であるとしている。



ベルリン
(写真・絵図
「堂々たる日本人」)

卿の名のもとに出されたものであり、大久保の欧米視察で得た知識が下敷きになってはいるが、原案の起草者として大久保の意にかなう技術官がいた。これがここに紹介する松野礪(はざま)である。

松野は弘化四年(一八四七)長州藩郷士の生まれ。偶々プロシヤ陸軍兵学校に留学する伏見宮(後に北白川宮)能久殿下の随員に選ばれ渡欧する。殿下は彰義隊に担がれて戦ったが破れ、奥羽まで逃れ賊軍扱いになっていたが、明治天皇の特赦により海外留学となったものである。殿下の入学のあと、松野は同郷であるプロシヤ公使青木周蔵の示唆によって「山林學」を専攻することに決め、ベルリン近郊のエーベルスワルデ高等山林学校に学んだ。

遣欧使節団一行のベルリン滞在は明治六年三月九日〜二十八日である。このとき全權大使名で求められ退出した留学生リストのなかにあった「山林學」に興味を抱いた木戸孝允の求めに応じ、青木に伴われた松野がホテルに向

く。そこで松野が「森林直接の利益、間接の効用より国家及私人経済上に必要な所以を詳述し尚日本山林の一日も忽諸に付すへからざる理由を論弁せられたり」と、森林の効用と国家経済上の重要性について熱弁を奮ったところ、同席の大久保利通が「案を拍って(机をたたいて)大いに悦んだ」とある。

森林管理の必要性は欧米回覧実記に度々触れられているが、ベルリンでの松野の話が維新政府の最高実力者、とくに大久保の共感を得たことの意味は大きい。青木周蔵もドイツ流の森林管理には興味を抱いており、松野の帰国の際に木戸(当時内閣顧問)に書簡を送り、松野を主幹とする森林学校の創設と林業経営の着手を建議している。

松野礪は明治八年八月に帰国し、かねて約束のあった大久保を訪ね、内務省木石課(山林課)に迎えられ初の林業技術者として林政に貢献する。その後技術者養成の必要性を痛感した松野は、樹木試験場(後の林業試験場)、東京山林学校(後の東大農学部林学科)を設立し人材を育成し、この分野の先駆者と呼ばれるようになった。

いささか春秋の筆法を用いれば、日本の近代林政・林学の源流は岩倉使節団のベルリ

泉三郎氏との出会いとその後

石坂芳男

泉さんとの出会いは私の学生の頃だから、もう四十五年以上も前の事です。四年も先輩でしたので、お会いしたのは氏が卒業後ですが、当時のダンディなイカス風貌は今もおとろえていません。

さて話は飛びますが、平成七年に行われた白百合女子大での岩倉ミツシヨンの

ン滞在を嚆矢とするというところになろうか。

米欧亜回覧の会への感謝

阿部修二郎

私の住む神奈川県茅ヶ崎に江戸末期藤間柳庵という名主がおり、綿密な日誌を残した。その中に嘉永七(一八五四年)年正月、彼の営む廻船業の初荷の船が異国船(黒船)二隻に追われて相模川河口に逃げ込んだという生々しい記述がある。黒船の衝撃を実感させる史料だ。

欧米列強の強圧の中で独立を守り、近代国家への道をひらいた先人たちに、私は学生時代から尊敬の念を抱いていた。TBS応募のさいは、志願票の「尊敬する人物」欄に大久保利通と書いた。岩倉使節団の歴史的意義も、漠然とは

集まりに参加、そこでいきなり新聞社の取材を受けてビックリしました。使節団の研究とビジネス最前線との接点を聞かれ、何と答えたかは忘れましたが、私は今でもグローバルイシューの中で、この使節団が欧米から学んだ事はその後の日本の政治、経済、社会、教育に多大な影響を与えているインパクトの強い歴史上のイベントと考えています。

泉さんは、私の駐在地ロスアンジェルスへも度々来られ、我が家に滞在され、我々駐在員もカストマイズされた泉塾的スライドショーを楽しませていただきました。

硬軟取り混ぜた解説にアルコールも入って、塾生も活発に質問とコメントを出し、すっかりその世界に浸ってしまいました。

理解していた。しかし、「米欧回覧実記」全巻を精読したのは、会社を退職し六十五歳になってからだ。そのときの驚きは今も忘れない。明治初期の人たちは、こんなに真剣に米欧諸国を視察し、周到な観察力と高い教養・見識を持つて世界を把握したのかと感動し、彼らの使命感と人間的な力量とに打たれた。ペリー来航のころには、ほとんど英語を理解できなかった日本人が、二十年のうちに米欧各国を調べ上げるだけの語学力を身につけ、漢字多用の文語体で複雑な地名・人名まで記述した努力には脱帽せざるをえない。現代のすべての日本人に『実記』の内容を知ってほしい。

米欧亜回覧の会に参加し

て、有能・多彩な会員が高い志をもって活動されることに刺激され、推進役の泉代表らに敬服した。三年間ほど「実記を読む会」に出席し、北海道旅行などにも加わって、貴重な勉強ができた。会の有意義な活動には心から賛同する。ただ、「現代語訳」の発刊後「読む会」は一段と専門化し、欧米の駐在経験のない私が見なさんに役立つ発表や発言をするのは困難になった。

猛烈なエネルギーと時間をかけて準備すれば、多少は役割を果たせるかもしれないが、残された人生で自分のやりたいことから離れてしまふ。そんなことから「読む会」への参加を控えている。あしからずご了承いただきたい。

英訳『実記』の漢詩考

小林養文

英訳『米欧回覧実記』を読んで何故漢詩の話なのかと思われる方もいるかもしれない。久米の『実記』原文には漢詩の引用や漢語の表現が多く、これがどのように解釈され、英語で表現されているかを見るのも英訳『実記』を読む楽しみの一つである。中には見事な名訳があつて思わず肯くことがある。また場合によっては、英語圏の人のために説明的に訳されていて、難解な漢語を理解する助けになることもある。一方、英語の表現でここは少々ニュアンスが違ふなど思うこともある。また原文ではそのまま読み過ぎてしまう詩句など、英語で読むと少々気になることを発見し、原文を読み返したりする。

(ロスリン)寺ノ右ハ谷ニ臨ミ、底ニ深林アリ、水声時ニ聞ユ、折シモ秋葉ノコロニテ、殊ニ景色多シ、谷ヲ下リ林ヲ分ツテ入レハ、径路一条アリ、水ニ沿ヒテ去ル、前岸ハ岩石聳ヘ立テ、水ソノ間ニ落チ、潺湲トシテ咽ヒサル、英蘇ノ水ハ其色玄ニシテ、清冷ノ致ナシト雖モ、此ニ入レハ、静幽ノ韻アリ、時ニ薄暮ニテ、雲陰返照ヲ漏シ、風度リ声ヲナサス、時ニ墜葉ヲキク、一鳥不鳴山更幽ノ境概ヲ覽ヘ、彷徨須臾ニシテ、車ニ上リ北ニ帰ル、

秋の夕光、水の色に触れ、川音、風、落葉と様々な音を挙げ、静幽な雰囲気を伝えてくる見事な描写である。最後に久米は「一鳥不鳴山更幽」という詩句を引用して、締めくくっている。これは岩波文庫版の田中彰氏の校注によると、宋の王安石の漢詩「鍾山即事」の結句の引用である。王安石は、梁の王籍の原詩「入若耶溪」から翻案逆用してこの句を作り出したらしい。その王籍の詩句には「蝉噪林逾静・鳥鳴山更幽」とあり、静中の動を巧みに捉えて、逆に静寂を表現している。芭蕉の「閑かさや岩にしみいる蝉の声」や杜甫の「伐木丁丁山更幽」の静かさの表現と同工である。これに対し

て王安石の句は「一鳥鳴かざ山更に幽なり」(鳥の鳴き声一つなく、山はいよいよひっそりと静まり返る)となつていて、動を否定した、いわば静中の静の表現である。その中から関連部分だけ英訳を示すと

On the other bank were towering rocks, the water cascading through them and flowing away with a roar. In England and Scotland the water is black in colour, so it does not give a sense of purity and coldness, but when we came to this spot, there was a resounding stillness. By this time dusk was falling. The rays of the setting sun pierced the clouds, and there was no breath of wind. Now and then we heard a leaf fall. We were reminded the line 'A single bird does not sing; the silence of the mountains is deepened'. (p. 234, Vol.2)

となつている。久米の書く「静幽ノ韻アリ」は動中の静として a resounding stillness と見事に訳されている。しかし王安石の詩句の部分は、原文に忠実な訳になつているが、静中の静を強調するだけ

で、これを読むと散文的で、静寂の表現として面白味がないように感じる。英語になると、漢詩の持つ響きも伝わらないので特にそういう感じがするのかもしれない。水音に耳をそばだて、風の動きはあつても音は立たず、時折落ち葉の音を聞きとがめ、久米は折角、動中の静を描写しているのに、王安石の詩句の引用では何となく落ち着かない。鳥が一声鳴かなかつたら、更に静寂を覚えただろうと言ふ意味にも取れないことはない。原文では見過ごしてしまつたところだが、英訳を見て久米は実際に鳥の声を聞いたのか、聞かなかつたのかと疑つて見たくなつた。久米はたまたま頭に浮んだ王安石の詩句を口にしたが、王籍の詩句のように鳥の声を聞いて一層静寂を体感したのではなかつたらうか。

因みに王安石は集句といつて他人の詩句を組み合わせる趣味もあり、梁の謝貞という人の句と上述の王籍の句とを組み合わせて「風定花猶落・鳥鳴山更幽」という聯を作り上げていたそうである。この上句は静中に動意あり、下句は動中に静意ありということ、面白い組み合わせで静寂さを表現している。これは「一鳥不鳴山更幽」と対比されて、古来詩話にはよく登場

する句らしい。久米が「風度リ声ヲナサス、時ニ墜葉ヲキク」と書いたのも、この聯が念頭にあつたのではないかと思う。

英訳『実記』を読みながら、脇道にそれて漢詩を勉強するのも一興である。

(注：王籍と王安石の詩句は、文献によつて「鳴」と「啼」の両方の表記があるが、ここでは「鳴」で統一した)

アヴァ号の事など

三原浩

一八七三年七月二十日、岩倉使節団が帰途マルセイユから乗船したアヴァ号は、一八七〇年 Messageries Maritimes 社が極東航路用に建造した排水量四千四百二十トン、長さ百十七m、幅十二m、乗客約三百人を収容する三檣二本煙突の船だった。四基の石炭ボイラーで二千四百馬力、速度は十三・八ノット、使節団が横浜からサンフランシスコまで乗船したアメリカ号(一八六九年進水、四千四百トン、三檣一本煙突の木造外輪船)とほぼ同じ大きさです。一八八三年蒸気機関の効率向上により、二本煙突から一本煙突に改造され、マダガスカル航路やインドシナへの軍隊輸送などにも活躍の後、一九〇〇年マルセイユで廃船となった。



1883年のL'Ava
(Messageries maritimes社ホームページより)

使節団を乗せたアヴァ号の Voyage No. 21の航海日誌には、八月二十九日香港出港後、強い北東の風に見舞われ、九月二日朝の上海入港が少し遅れたと記されているが、久米の回覧実記にはそのような記述は無く、逆に八月三十一日の項には、「昨夜ヨリ台湾島ト、福建地方トノ間ヲ駛行ス、風波為ニ平穩ヲ覺ヘタリ」と記されている。アヴァ号は修理の後九月十四日に上海から香港へ向かって帰路に就いている。九月二日上海で下船した使節団は、実記によると九月四日夜アメリカの郵船「ゴールデンエン」に乗船し、五日十時出港しているが、現代語訳の水沢周先生が訳者注で詳しく指摘している。長崎に六日朝八時到着するためには十九七七ノットと言う有り得ない速度で走らなければならず、実際の出発

は四日十時だったのではないかと述べている。上記アメリカの郵船「ゴールデンエン」は、アメリカ号とおなじく、Pacific Mail Steamship Company (American President Linesの前身)の船かと思われるが、当時の同社のスケジュールを見ると、月一回のChina Line (サンフランシスコー横浜ー香港)に就航していたのがアメリカ号とコロラド号(三千七百二十八トン)で、それらしい名前の船は月三回のPacific Line (サンフランシスコーパナマ)のGolden City (二千五百九十トン)とGolden Age (千八百七十トン)しか見当たらない。九月十三日使節団が横浜に帰着した時の船の正確な名前は、当時の新聞で調べても判るかと思うが、ご存知の方はお教え下さい。あわせて、この日大使と共に帰国した一行全員の名前も知りたいものである。

と思われるが、土壇場で変更になったのは、アヴァ号が香港・上海間で強風のため少し遅れたためコスタリカ号に乗れなかったのか、あるいは何か他に理由があったのか、これも教えて頂きたい点である。

ODA雑感

西川武彦

ご縁があつてJICAのセミナーをマネジメントしている。ODAプロジェクトの一つだ。途上国の文部高官を招き、一ヶ月弱、わが国の能力開発について学んでもらう。今年の対象国は、ツバル、ニウエ、キリバス、イラン、ウズベキスタン、イエメン、エジプト、ジブチ、コートジボワール、チャド、コンゴ、赤道ギニア等。太平洋の島国は、温暖化の余波で水没寸前の小国ばかりだ。アフリカ諸国は内戦や隣国との争いに悩む。地政学的に欧米(日本もギルバートを占領した)に弄ばされた上、植民地支配から解放後に発見された石油、天然ガス等の天からの恵みは、ほんの一握りの懐を潤すのみである。

ほとんどの研修生は、地元でとっているエリート官僚だ。セミナーでは、まず自国の国情と能力開発の実情をプレゼンテーションする。つい

で、日本の官民での能力開発の歴史を、江戸時代、明治維新、終戦から高度成長、バブル崩壊後に区切って、時代背景と対比しながら講義する。続いて、国内各地で、大中小の各種メーカーでの訓練・教育を見学する。伝統工芸専門校も訪れる。最後は学んだことを自国でどう活用するかのアクション・プランを描き、全員の前でプレゼンして終了する。セミナーのマネジは今年で五回目になり、通算六十カ国ほどの研修生とお付き合いましたことになる。古希の老人が半ば公徳心から、半ば興味本位で「奉仕している」。

セミナーは百三十余年前の岩倉使節団の超圧縮版といえなくもないが、研修生は日当が国によっては月給ほど支給される。ただで海外旅行してお金が貯まる仕組みだから、上級官僚が利権としてたらいまわししている感じも拭えない。

昨年からは、岩倉使節団のDVDを触りだけ見せている。時間が限られており、解説が日本語なのでフルには使えない。ただし、悲しいかな、例外なく援助頼りが身に染み込んでいる。恐竜が絶滅した白亜紀のような地殻変動がない限り途上国が変身するのは難しいかも、と隠居は呟いている。

岩倉ミッシェンの訪英土産
川井 充

神田喜一郎氏著『墨林問話』(岩波書店、一九七七年、八十六頁)に大略次のような叙述がある。神田喜一郎氏(一八九七〜一九八三)は中国文学の碩学です。

「明治五年、時の右大臣岩倉具視の訪英岩倉ミッシェンにおいてイギリス印度局の懇請に応じて、黄檗版の一切経を寄贈し、これがもともとなつて名高いサミュエル・ビール」の「The Buddhist Tripitaka」やその他の研究書が出来、ヨーロッパにおける中国仏教研究の基礎が開かれたのである」

一切経とは三蔵(経蔵、律蔵、論蔵)及びその注釈書法を含めた仏教聖典の総称であるが、江戸前期に黄檗宗の僧鉄眼(てつげん)が十三年間の苦心惨憺の末復刻したものだそうである。このような世界的な文化財を整備して活用していた江戸期の文化レベルにも驚くが、これを知っていても土産に所望した英国の知的レベルにも感心する。

ともあれ日本からのお土産が欧州学界の中国文化理解に貢献したことは重要な歴史的事実と思う。

グローバル・ジャパン研究会 四月より新方式でスタート!

グローバル・ジャパン研究会は四月より密度の高い研究会を志向し新方式でスタートする。一貫したテーマ「世界の中の日本人の役割」に基づき、各分野の研究者が発表、質疑応答を行い、それをまとめて印刷物にすることを前提とする。外部に発信できるレベルのものを目指す。

第一回は、四月十八日(金)、十八時三十分〜二十一時。国際文化会館セミナールーム。

発表者は、吹田尚一氏(元三菱総研常務、敬愛大学教授、会員)。テーマは、「日本発の世界平和構想をーグローバル・ジャパンのための具体的提案」。参加費三千円(資料代含む)。申込みは、事務局担当の小松優香さんまで。

なお、前回は十二月四日、国際文化会館で行われ、「西洋的近代化を超える思想」をテーマに、永池栄吉氏、塚田晴可氏、安原利雄氏の三人の論者から発表があり熱心な質疑応答があった。

[参加申込み]

小松さんへ連絡してください。

電話 080-6612-1101

FAX. 043-238-6690

メール yuka_komatsu1101@yahoo.co.jp

実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



■第百十三回

十一月十三日、出席者十四名。第六十八巻「スエーデン国の記・上」を鶴飼さんが報告。

今回は、深川の名園「清澄庭園」にある「涼亭」において、ランチ忘年会としゃれこんだ。

さいわい小雨もあがり、初冬の緑が生気を帯び、池に群れ遊ぶ野鳥の風情に、しばし見とれる。

○何よりも嬉しかったこと：西井先生が久し振りに元気なお姿を見せて下さった。

○何より有難かったこと：ランチなんて、とんでもない。豪勢な本格「和食」でした。○何より驚いたこと：鶴飼さん



忘年会を兼ねた第113回読む会 (清澄庭園)

作成のプリント。(第四十九号の四・五頁参照)

■第百十四回

一月十日、出席者十二名。今月は、高田誠二「久米邦武」(ミネルヴァ書房)をめづつての懇談。

有難いことに、正月休み五日間で本書を通読された鶴飼さんが、レジュメ「読書メモ」を用意して下さいました。そこで、この「読書メモ」にそつて、鶴飼さんに「一貫貫」的報告をして頂いた。また、出席の面々からも、別の角度から発言多々あり、所見のやりとりは暫く続きそうである。ここでは、鶴飼「読書メモ」の個性あるスポットを紹介する。

〔内容〕私の関心事項は久米さんの生い立ち。第二章 修学時代(二十九頁)のうち、使節団出發までの要点。(スタイル)

歴史書や伝記のスタイルを「楷書型」、「行書型」、「草書型」に分類すれば、本書は紛れもなく「草書型」に属する。久米さんの言葉(「伝記は撮影の如し。…」)を引用してそのスタイルを宣言している(二二〜二四頁)。索引も素晴らしい。

〔構成〕著者の拘りが遺憾なく發揮

凡愚亭 雑歌 二〇〇七

小野 博正

人間は 神の造りし 失敗作 巨大な脳が 地球滅ぼす
その昔 花街といふ サロンあり 男を磨く サロンぞ恋し
今年また 日本の寿命 世界一 生くるに値す 世に在りしかや
現代を 先進国の 平和といふ 戦場はみな 途上国ゆえ
余命あと 一週間の ホスピスの 人起き上がり 己が生語る
東大を 世界で知力 一番へ 改革すといふ その言やよし
悠然と 砂漠に生きる 民のあり 時間単位で 生きる虚しさ
国民の 総幸福と 市場主義 相容れぬこと 水と油か
過消費の 物トラウマの 解消を いくら叫べど 人は踊らず
資本主義に 徳はあるかと 問はれば あるはずもなしと 我は答えむ
記憶力 増強の記事 直ぐメモす この頃の我 はつかに悲し
自他一如 己のころ よりいだし 森羅万象 つながっている
教育は 読み書きそろばんにて 足るをゆとりをすてて 詰め込む日本
魂魄の 離れゆくごとく うつせみの ものみな離れり 粒子反粒子
勝ち負けの あわいを埋める ものにこそ 人の幸せ 宿るとぞ知れ
まっとうな 政治家欲しと 思えども まっとうな人 政治家嫌ふ
花描き 自然の妙に 没入す 無心となる 無二のひとつとき
鉄砲の カラシニコフは 名器らし 一億挺が 世界に溢る
憲法を 勝手に解釈 改憲し 実態合わぬと 無法者言ふ
枯葉剤 その象徴の ベト君は ドクに託して 生終ゆるらし
「卵子だけ生殖」時代来るといふ いやよ男子は何して生きん
世界中 投機の金が 徘徊し 資本主義を 崩しゆくらむ
ひとはみな 世界で一つ だけの花 あるがままにて 美しき花
生きる意味 ただひたすらに その意味を 求めんために 人は生きゆく
神のなき 日本の戦後 新しき 神を求めて さまよいおらむ
日本と 全人類の 未来とは 経済成長の 神殺すこと
ガンジーの 非暴力主義 遠のきて インドは核と 欧化に挑む
鬼やらふべき鬼つねに おのが身の うちにこそおれ 豆喰らひつつ
曾祖父の 遺体の唇に 水ぬらし 頬に口ずく おのこやさしき

しているのが第三章。全部で五十二頁、各項目のタイトルとは関係なく「草書型」の典型とも言える自説を展開する。著者の真髓は第五章二「史家への転成」、特に頁百七十六〜百八十二。「漢文調とどう付き合うか」が面白い。(文責) 桑名正行

■第百十五回

二月十四日、出席者十名。「第六十九巻 瑞典国ノ記」に記述されている内容は、使節団がストックホルムに到着した一八七三年四月二十四日の二日後の二十六日から、二十九日までの四日間訪問、見学した場所、事項である。訪問先は、海軍工廠、鍊兵施設、離宮、ラシヤ工場、造船場、木工所、マツチ製造工場、製鉄所、小学校、及びチーズ工場などである。一行が、同国を訪れた時は、オスカル二世の治世下であるが、前任のオスカル一世の時代に既に国王の統治権は形骸化し、民主化が推進されていた。十九世紀末のこの国の総人口は四百万でこの内百万が米国へ移民、仕事が無く、欧州の最貧国であった。

『実記』は、訪問先のうちマツチ製造工場及び小学校のそれぞれに、ほぼ二頁を割いて詳述している。英訳実記の訳者注には、当時の新聞が、一行がマツチ製造工場に多大

の関心を示した旨報じたという記述がある。報告者は、このマツチを取り上げ、『実記』の記述を音読。ここには、一行が見学した製造工程(第一〜七)が詳しく記されている。

いわゆる、安全マツチは一八五二年、スエーデンのルンドストレームが発明、また、一九二二年には、毒性の強い黄燐マツチ(一八三〇年、仏人発明)の製造は世界的に禁止された。日本では、一八三九年(天保十年)高松藩士、久米通賢(みちたか)が、雷汞マツチを発明したのが、最初の国産マツチとされているが、工業化は、元金沢藩士清水誠がフランスで習得した技術により一八七五年(明治八年)に黄燐マツチを製造したのが最初で清水は大変苦勞を重ねて、工業化に成功し「新燧社」を創業した。清水は、スエーデンも訪れているが、岩倉使節団とのつながりは、不明。ただ、大久保内務卿が、清水にマツチ製造に専心するよう薦めたと伝えられている。マツチは、お茶、紡績とならぶ輸出産業として近代日本の発展に大きく貢献した。スエーデンは、当時も今も世界最大のマツチ製造国であるが、日本も明治後期から大正期にかけて、スエーデン、米と並んで三大製造国として君臨した。

永島脩一郎
(文責)

【読む会】番外編案内
・日時、五月二十七日(火) 十三時三十分〜十五時三十分。
・テーマ、高田誠二氏を囲んで著書「評伝久米邦武」および美術館についての質疑応答。
・場所、久米美術館(山手線・目黒駅西口一分、久米ビル八階)
・会費、千円

英訳実記を読む会報告
連絡 岩崎洋三
Tel & Fax 03-3488-0532
y-iwasaki@isr.or.jp



■第五十六回
一月二十四日、出席者九名。岡部さんが英国スタッドフォード州バーリーのビール醸造所とワールック州コヴェントリーのレース織工場見学部分を報告。同席者に飲兵衛が少なくないことから、「おじいさんが作ったビールは美味しかったのか？」から醸造の工程の検証まで止め処がなかった。それにしても、二人分ほどの長いところを、報告メモを十頁以上用意して丹念にご報告いただいた岡部氏に感謝。

次いで岩崎さんがシェツフィールド市の刃物工場見学部分を報告。「カンタベリー物語」にも登場する長い歴史

のある産業だが、刃物研ぎの職人の寿命が平均より二十〜三十年くらい短かったことや、岩倉使節団の前後にエンゲルスやオーウェルらも訪問して悲慘な状況をアッピールしていたことを知って、当時の歴史に益々興味が沸いて来た。

■第五十七回

二月二十一日。森本さんがコベントリーの絹織物工場見学部分を報告。この時期英国の絹織物需要は旺盛で、イタリア・フランスと並んで日本からの絹糸輸入も少なくなかったが製造技術未熟のため価格は前二者の半以下とのこと。

次いで新倉さんが懐中時計工場とガラス工場見学分を報告。板ガラスはロール法やフロート法で作るものと思っていたが、この時見たのは一八三二年にフランスから伝わった円筒ガラス法であった。かなり重い熔けたガラスを吹いて円筒を作り、それを切り開く方法とのことだが、そんな方法で均一な厚さのガラスを得ていたことを知ったのは新鮮な驚きだった。

やっとなら第二巻英国編の三十七章を読了しましたが、ここまで義十七回もかかっている。本当に『実記』は読めども尽きない。

(文責) 岩崎洋三

関西支部報告
連絡 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第四十二回
一月十九日、出席者十一名。長年、教育行政の責任者であった会員の榎居さんに『戦前の「国史」と戦後の「日本史」』の話をして頂いた。

世代別の常識的な歴史関連のワードを挙げ、戦後生まれでも、六十歳と四十歳で常識的な歴史語彙が相当異なることが示された。日本ほど歴史が非連続かつ断絶的な教育となっている国はないのではないかと認識を新たにしました。

続いて『実記』第一巻の朗読と議論に移る。

米国滞在中に大統領選挙戦に遭遇し、一行は興味を相対当掻き立てられたようだ。(三百十四頁) 出席者の間で、アメリカは、理念だけでなく連邦国家としての「合州国」、つまり大統領の選出が州としての意思の表明であるということ、及び大統領選挙が広大に広がる州の統合として始められた制度であるという歴史的な面を引き継いでいることを理解しなければならぬという結論になった。

(文責) 難波康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣 旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。
- 会 員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例 会** 年に4回くらい全体例会をもちます。
- 部 会** テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役 員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会 費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」(2007年7月17日より)
〒170-6045 東京都豊島区東池袋3-1-1
サンシャイン60 45階
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:03-5979-2273 FAX:03-5979-2552
- 入会申込**
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
書籍・DVD案内も掲載

<http://www.iwakura-mission.jp>



<催し案内>

2008年3月～5月の予定です

☆4月全体例会

日 時：4月20日(日) 13:00～17:00
一部 会務報告 13:00～14:00
二部 ビデオ上映と解説 14:00～17:00
テーマ：NHK・BS特集
「世界から見たニッポン(明治編)」上映
解 説：辻泰明氏(制作責任者)
場 所：国際文化会館講堂
会 費：2,000円(学生1,000円)

☆実記を読む会

日 時：3月13日(木) 18:30～21:00
4月10日(木) 13:00～16:30
5月8日(木) 18:30～21:00
場 所：国際文化会館(会費は1,000円)

☆英訳実記を読む会

日 時：3月27日(木) 18:30～21:00
場 所：財)統計研究会(会費は1,000円)

☆歴史部会

日 時：4月1日(火) 18:00～21:00
場 所：国際文化会館
テーマ：「銃を持つ民主主義」
一日米関係と大統領選挙(松尾文夫氏)
会 費：1,000円

☆グローバル・ジャパン研究会

日 時：4月18日(金) 18:30～21:00
場 所：国際文化会館(会費は3,000円)
テーマ：「日本発の世界平和構想を」
発表者：吹田尚一氏(会員)

☆第1回「DVDを見る、聞く、語る会」

日 時：4月12日(土) 13:30～16:30
場 所：JICA地球ひろば
渋谷区広尾4-2-24(03-3400-7717)
会 費：1,000円(学生無料)

☆関西支部例会

日 時：4月12日(土)
場 所：大阪弥生会館

編集後記

◇平成七年十月二十六日の創刊から、数えて第五十号となる区切りの号となります。十三人の会員による寄稿によって、六頁を越える記念特集を組むことができました。増頁となって編集が大変と思われるかもしれませんが、短期間に二千文字弱の原稿を仕上げる方がたくさんいて、あまり大きな苦労は感じませんでした。編集で一番困るのは、空白が中々埋まらないときです。

◇会員による紙面作りの着想は、好評だった前号の、中村・桑名・橋本三氏の寄稿掲載から得ています。前号では、紙面の関係で大分割愛を余儀なくされたのですが、増頁とした今号は、ほぼ全文を掲載することができました。

この二号の経験を通して、会員というニュースの源泉を掘り当てたと実感しています。今後も、継続したいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

◇記念特集のほか、新春放談会や四月から始まる「DVDを見る会」など、NPOらしい新しい企画が実現し、懸念だった、当会の活性化への動きがいよいよ始まります。残るは、若い世代の協力が必要なホームページ活用への取り組みでしょうか。(N)